仕事は私の生きる糧

喫茶レストラン経営
大野　一二三（ひふみ）さん・美枝子さん・多香子さん

子育てをしながら続けてきたお店

近所の会社で働くビジネスマンが、お昼ご飯を食べに次々とお店にやって来ます。お客さんを席へ案内し、水を出し、注文を取り、できあがった料理をテーブルへ運ぶ。そんな昼時の慌ただしいホールを、あうんの呼吸で切り盛りするのは、大野一二三さん、娘の多香子さん、義娘の美枝子さん。キッチンでは、一二三さんの夫・勝弘さんと息子・貢一さんが鍋を振り、次々と料理を作っていきます。

50年近くもの長きの間、愛され続けている喫茶店「トロント」

「トロントは私が25歳の時に始めました。モーニングにランチ、ディナーをやって、息子と娘を育てながら仕事をするのは大変でした。子供たちには寂しい思いをさせてしまうこともあったと思います。でも、お店を休んだら生活していけなくなってしまうから。以来、ずっと続けていますよ」と一二三さん。

47年前にオープンし、勝弘さんと夫婦二人三脚でやってきた喫茶店トロント。息子の貢一さんと、娘の多香子さんがお店を手伝うようになったのは、勝弘さんが病気で倒れてしまった時でした。

「20年ほど前です。兄は他の飲食店で働いていて、私も勤めに出ていました。母も父の看病があり、お店をどうにかしないといけないということになり、兄と私は会社を辞めて、お店に入ることにしました。そのあと、お義姉ちゃんも、手伝いに入ってくれるようになりました」と多香子さん。

おぎない、支え合いながら家族みんなで

その後、療養を経て、勝弘さんが仕事に復帰。美枝子さんと多香子さんが出産、子育てに負われる時期などはアルバイトの方に来てもらうこともあったそうですが、現在は、勝弘さん、一二三さん、貢一さん、美枝子さん、多香子さんの5人で日々、お客さんを迎えています。

家族で朝から晩まで顔を付き合わせていると、色々と苦労もありそうですが……。

「慌ただしい時や、疲れがたまってきてしまった時などに、キッチンでお義父さんと夫が衝突することがあるんです」と美枝子さん。

「それをお義姉ちゃんがなだめてくれるんです。私も、時々、家で両親とケンカをしてしまうんですが、お店には絶対に持ち込まないように気をつけています」と多香子さん。一二三さんはどのように感じているのでしょう。

「うちではよく家族会議を開くんです。みんなで思っていることを話し合います。お恥ずかしいことですが『お店をもう閉めよう』なんて言い合いになったことも、何度かありましたよ。だけど、来てくださるお客さんがいるし、私たちにはここしかありませんから。イヤだって、やめられませんよ。いろいろあっても、我慢です」

そう話す一二三さんに、やさしい眼差しを向ける美枝子さんと多香子さん。

「母も最近は体がつらそうだから、少しでも楽をさせてあげられたらと思っています。義姉も私も、3人の子育てをしており、フルには働けないのですが、新メニューを考えたり、自家製パンを販売したりして、新しいことを始めています」と多香子さん。

続けて、美枝子さんは「ここは、家族みんなでおぎない合って、支え合っているから、一人でも欠けるとまわらなくなっちゃうんですよね」と言います。

そして二人は目を合わせ「イヤでもやめられないよね」と微笑み、一二三さんは「仕事は、私にとっては生きがいですよ」と力強い言葉を残し、三人の看板娘は持ち場へと戻っていきました。

モーニング、ランチ、ディナーを3人交代で切り盛りする。一二三さん（中央）と義娘・美枝子さん（左）、娘の多香子さん（右）

母でもなく、妻でもなく、私でいられる場所

パートタイマー　入江　麻由子さん

家事・育児という仕事に専念

「もう聞いてくださいよ！　今朝、長男が登校の直前に『制服のボタンがとれてる』って言うんです。しかも全部！　毎日、こんなことばっかりです（笑）」

開口一番、朝の慌ただしいエピソードが飛び出てきました。

「でも二人とも、小学校に上がって、少しずつ手が掛からなくなってきました。それまでは、来る日も来る日も24時間、二人の乳幼児と対峙し、長男が小学校、次男が幼稚園の時は二人の時間がバラバラ。まったく余裕がありませんでした」

1年前までの日々を振り返り、そう話す入江さんは、長男が生まれる前まで、保育士として働いていました。

「子供が好きなので、子供に関わる仕事がしたいと思い、保育士になりました。大学の附属病院で4年間病棟保育に就き、その後、訪問型の病児保育現場で働いていました。仕事はずっと続けていきたいと思っていたので、結婚、妊娠後も勤務していました。ただ悪阻がひどく、一旦、仕事を辞めました」

職場は出産・育児へのサポート体制が手厚く、入江さんは妊娠後に、現場から本部へ異動し、業務の軽減などしてくれたそうです。

「続けようと思えば続けられたのかもしれません。ただ、長男の妊娠前に一度流産してしまったことがあり、夫とじっくり話をしました。当面は、私は体調管理をしながら家事を担当し、夫は外で働き生計を支えていく。夫婦のお互いの役割分担をそのように決めました」

地域での活動やPTAで社会と関わっていく

長男に続き、次男が入江家に加わり、入江さんの仕事＝家事・育児はドタバタを増しました。

そんな中、入江さんは、幼稚園のPTAの役員を引き受け、また、台東区の『ファミリー・サポート・センター』で、他の家庭のお子さんを預かることなどを始めました。

「子供の成長と共に、生活のリズムが作れるようになってきたので、仕事をしたいなと思い始めていました。でも、子供のことがあるのでフルタイムでは働けません。ファミサポは自宅でできる仕事です。まだ、なかなか思うようにできていないのですが、近所に児童館や子ども家庭支援センターがないので、預け先に困っている家庭の役に立てればと思い始めました。PTAは、子供たちの成長に関わっていけたらと思い、お引き受けしました」

PTAでは、色々な会に出席し、様々な方と関わりを持つことで、視野が広まり、視座も少しずつ高まっていったように感じたと入江さんは言います。

「家事や育児は直接的にお金にはならないのですが、以前に夫からこんなプレゼントがありました。ボーナスの日に、夫から封筒を渡されたんです。中を見るとお金が入っていて。『これは二人で稼いだお金だから、半分ずつ好きなことに使おう』と。嬉しかったですね」

そしてまた、幼稚園のお母さん同士の繋がりから、入江さんに新たな道が開かれました。

私らしくいられる場所

「私はパソコンができなかったのですが、配布用の手紙や資料を作成するために勉強しました。試行錯誤で毎回作っていたのですが、そうこうしている中で、ママ友のお母さんから『パソコンができるなら、会社の仕事を手伝ってくれない？』と声をかけていただきました。家事に支障がない時間帯に来てくれればいいと」

入江さんは、夫に相談し、週3回、9時半から12時まで勤務することにしました。

「今は短い時間しか勤務できませんが、色々な経験をさせていただいています。日々、勉強です。子供の成長と共に、勤務時間を長くできるかもしれないし、高学年に上がると、それもまた難しくなるのかもしれません。そのあたりは臨機応変にやっていけたらと思っています」

最後に、入江さんにとって仕事とは何ですか？と尋ねてみました。

「母でもなく、妻でもなく、私でいられる場所です」

仕事に家事、育児、地域活動とパワフルに動き回る入江さん